



TITLE:

紅萌（くれなゐもゆる） 12号

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会「紅萌」編集専門部会

CITATION:

京都大学広報委員会「紅萌」編集専門部会. 紅萌（くれなゐもゆる）
12号. 紅萌（くれなゐもゆる）：京都大学広報誌 2007, 12

ISSUE DATE:

2007-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196795>

RIGHT:

紅萌

くれなゐもゆる

KYOTO
UNIVERSITY
MAGAZINE

第 **12** 号

京都大学広報誌




巻頭鼎談

ゲスト ■ 池坊美佳
華道家元池坊青年部代表

ホスト ■ 木谷雅人
京都大学理事・副学長
(総務・人事・広報担当)

大嶋正裕
京都大学大学院工学研究科教授
(『紅崩』編集専門部会長)



京都で育った池坊美佳さんは、人々を華道の世界に誘う仕組みを日々、模索している。また、京都の魅力を首都圏に発信する。京都市のアンテナショップ「京都館」(東京・八重洲)の館長でもある。一方、学問の魅力の発信を心がける京都大学では、時計台のレストランの利用者など構内に入る外部の人がふえている。そして、広報担当の木谷雅人理事・副学長を中心に、さらに敷居を低くし、開かれた大学のアピールを試みている。将来に向けて、伝統の魅力の発信は、いかにあるべきだろうか。

紅崩

くれないもゆる

KYOTO UNIVERSITY MAGAZINE
京都大学広報誌 ● 第12号
2007年9月

表表紙 京都大学附属図書館所蔵の絵巻物・奈良本コレクションのうち『伊勢物語』のいくつかの場面をコンピュータ処理により合成した。

裏表紙 京都大学の動き

- ① 巻頭鼎談
伝統の魅力をどう発信するか
ゲスト 池坊美佳
ホスト 木谷雅人、大嶋正裕
- ⑦ 心の中の京都大学
平澤興先生のこと
吉田修
京都大学、ここ十年の変化
小原文明
- ⑨ 研究の最前線から
人とモノのネットワークから
地域を見る
足立明
- ⑬ これ——そ、なむ、や、か、こそ——学問
動物とかかわり、広がる生きる知恵
矢野智司
- ⑰ 京都大学をささえる人々 楠田敏之
- ⑱ 輝きは躍動から 衣笠陽子、音羽佑規
- ⑲ 京都大学再発見ツアー
国際交流センター
国際的学術交流を支援する
- ⑳ 総合博物館のモノ
日本最大級の標本コレクション
植物の姿を同時に再現する
永益英敏

大嶋 今回のテーマは、「京都文化と京都大学のこれから」です。将来に向けての京都からの情報の発信について、池坊美佳さんと木谷雅人理事・副学長とともに語り合っていきたいと思います。テーマにちなんで、京都大学の清風荘の東棟に場を設けました。清風荘は内外の賓客の接待や教職員の会合などに利用されていますが、一般には公開していませんので、京都市民でも知る人は少ないのではないかと思います。池坊 私は清風荘に着くまで、また建物に入ってから、いつたどこに連れて行かれるのかと思いました（笑）。外から見ると塀と木立に囲まれていて、この建物のことはまったくわかりませんでした。こういう機会でもないとなかなか拝見できませんね。

木谷 もともとここは、元公爵で、二度首相をつとめた元老の西園寺公望（一八四九〜一九四〇年）の京都別邸でした。京都大学が創立されたのが一八九七（明治三十）年ですが、西園寺はその当時の文部大臣で、京都大学の創設にもぎわめて熱心でした。そういう縁もあり、本学の創設を公私とも支援された西園寺公の遺徳を偲ぶため、一九四四（昭和十九）年に所有者の住友家から本学に寄贈されました。

現在の建物は、西園寺時代に改装されたものです。その当時名工と謳われた大阪の木工・八木甚兵衛の手になるもので、五年の歳月をかけています。建物は本館と八棟の付属屋からな

清風荘の庭園で語り合う、左から池坊、木谷、大嶋の各氏。

伝統の魅力を どう発信するか





池坊美佳

■いけのぼろ みか
1992年 佛教大学社会学部卒業
華道家元池坊青年部代表
2003年 首都圏での京都発信の拠点
「京都館」館長

り、瀟洒な数寄屋造りの本館は、東・中・西の三棟で、それぞれ茶室・間取り造りで機能的になっています。二〇〇六年の十二月に国の登録有形文化財（建造物）になりました。

庭園は、植治（植木屋の治兵衛）と小川治兵衛の手になるものです。明治期の代表的な庭園ということで評価も高く、一九五一（昭和二十六）年に国の名勝として指定されています。その特徴は、東山の風景を借景として、近くを流れる太田川（現在は暗渠から水流をひいていて池には多様な魚類が棲息していることです。もともと、東山の借景は、今では周囲に高い建築物が増え、ある視角から大文字が垣間見えるだけになっています。

池坊 清風荘は気品が高く、優雅です。京都の町には、あらゆるところに歴史と伝統と文化が入り組んでいます。それを京都人はずっと当たり前のよう目にして、手に触れて、肌で感じてきていると思います。でも、例えばいけばななどの伝統文化をこれからどうやって伝えていくのか、京都の伝統文化をどう発信していくのか、立ち止まって考える時期にきているように思います。

コンセプトは「自由の学風」

池坊 バブルの時代が終わり、「ものから心の時代へ」と言われています。先が見えにくい時代で、答えはずっと出ないかもしれません。でも、心をゆたかにするには何が必要で、何を省いていくのかを考えたいと思います。そのときに、伝統の真髄は守りながらも、古いものを捨て、新しいものを取り入れることのできる心の強さが必要だと思っています。

大嶋 京都のどういう点がそういうことに役立つのでしょうか。生粋の京都育ちの池坊さんから見るとどうなりますか。

池坊 いけばなの世界に生まれて、現在は池坊の活動とともに、東京・八重洲中央口正面にある京都市のアテナショップ「京都館」の館長をしています。国内外を問わず、いかに京都が多くの人々に愛されているかは、京都を

離れてみて初めてわかりました。こうした活動とおして、京都の魅力を発信していくことが大切だと、すごく感じました。

京都には春と秋だけではなく、年間を通じて多くの観光客が訪れていますが、京都人は別にそれをウェルカムとは思って

いません。観光客が京都に来て当然だと思っています。ですから、受け入れ体制の整備については、京都人はどちらかと言えば下手だったと思います。私は館長になって、京都のよさ、いけばななど伝統文化のすばらしさを、自分の口で伝えていかなければならないと痛感しました。一人一人の力は小さいかもしれませんが、それが自分が生まれ育った京都、自分が愛する京都にお返しすること、やるべき義務だと思っています。

木谷 すばらしいですね。京都の人間は当たり前のように思っています。意外に京都の魅力に気づいていないのは、よくわかります。同様のことは京都大学にもあてはまります。これから京都大学に対するいろいろな人の支持や理解の輪を広げていくことに、ぜひ力を入れていきたいと思いい、昨年（二〇〇六年）十一月には東京で、産業界、行政、学術団体などの関係者をお招きしてフォーラムを開催しました。また、この三月に東京駅前のサピアタ



大嶋正裕（おおしま まさひろ）
京都大学大学院工学研究科教授

ワー内に京都大学東京連絡事務所を置きました。ここには現在、全国の十四大学の拠点が集まりつつあります。京都館ではどんな活動に力を入れていらいつしやるのでしょうか。

池坊 基本的には、京都館に足を運んでいただいた方に情報を発信して、京都に来ていただいて、リピーターになっていただくことです。

京都館では、情報やおみやげをできるだけ揃えています。でも、京都に足を踏み入れて初めてわかる風景の深みと広がりを感じていただいて、もつと知りたい、何度も訪れたい京都であるためには、常に情報を発信し続けることが大切だと思います。私はゆくゆくは京都に住んでいただくというところまでお誘いしています。

木谷 京都大学がほかの大学に比べてある意味で少し恵まれているのは、「自由の学風」と言われる、明確で広く知られたコンセプトがあることです。これは東京大学について二番目につくられた国立大学で、東京大学にはない



木谷雅人（きたに まさと）
京都大学理事・副学長

歩きながら 考える

どういうことが求められているのかを、初代の総長・木下廣次が考えたのだと思います。教員と学生同士も〇〇さんと呼び合うなど、自学自習を重んじる「自重自敬」の精神です。

もう一つは「探検大学」と呼ばれていることです。今西錦司がよく知られていますが、机上の理論ではなくて、フィールドに実際に出ていって、現場での観察から理論を組み立てるという良き伝統があります。

京大にいれば当たり前のことと思っていますが、活動内容や学問の魅力を発信していく努力が必要なのだろうと思いました。

池坊 専永宗匠から「次代の人材育成を」と言われ、池坊青年部事務局が一九九二（平成四）年に発足した当初から、私は青年部代表になりました。池坊いけばなの「入口づくり」という役目を自分の使命と考え、試行錯誤を繰り返しながらも、日々「愛する池坊」に力を注いできました。池坊は元来、聖徳太子の創建と伝えられる六角堂頂法寺の坊の名で、代々池のほとりに住まいがあつ

たため人々から池坊と呼びならわされました。

現在は、英会話、ヨガなど趣味にもいろいろな選択肢があると思います。英会話だったら、どれだけしゃべれるようになったか、すぐに結果が出て、自分の肌で感じる事ができます。お茶にお花、能、狂言に謡、踊りに書道とお稽古ことが当たり前の時代もありましたが、今は池坊と言っても、若い方は「お茶でしたっけ、お花でしたっけ」と聞かれるぐらいの時代です。そのなかで伝統文化を次の世代にも残していくのは簡単なことではありませんが、しっかりと自分で華道の魅力を発信していかなければなりません。

大嶋 池坊の歴史は六百年ぐらいと聞いていますが。

池坊 お花もお茶も、室町時代には女性ではなく、男性のものでした。それが一般の皆様に伝わって、女性がする習いごとの一つになったのです。

江戸時代のいけばなの中で、もともとも古い様式が立花です。室町時代以前は、花を生けることを「花をたてる」と呼びました。花は神や仏にたむけられるものでした。池坊のいけばなは、もともと仏様に供えるお花から始まりました。池坊の祖先は、朝夕宝前に花を供えてきました。仏様に供えるお花というのは、医学が現在ほど発達して



鼎談の場に池坊美佳氏が生けた花。軸は43世池坊専啓（せんけい）。茸狩（たけが）りや 戻れば 痛き 茨疵（いばらきず）。いけばなは、現代の暮らしに適應する様式としての生花正風体（しょうかしょうふうたい）、3種生け。花材はオミナエシ、シマズスキ、キキョウ。

いなかだった時代、自分の身近な愛する人が病で苦しんでいるのを見て、祈りをこめてお花を供えることから始まりました。「いけばなは足で生ける」と昔から言います。今のうちに、お花屋さん四季それぞれの花材があるわけではなく、近くの山に登って、納得のいく花材にめぐり合うまでずっと探し、一つの作品に至っていました。

華道の精神でも学問の精神でも伝えていくことには何か共通点があるように思います。いけばなに対する向き合い方の根底は祈りです。自分が信じるものからいけばなが構成されている。それは今も変わらないと思いますね。

木谷 それが、いけばなと、いわゆるフラワーアレンジメントの違いですか。池坊 そうだと思えます。いけばなのほうが面倒くさいですよ。歴史もあるし、勉強しなければいけないこともあ

ります。でも、勉強を始めると結構おもしろいと言つてくださる方が圧倒的に多いのです。一步を踏み出すまでは、面倒くささのほうに先きたり、堅苦しさのほうに先きたりすると思います。

いけばなと言えは花器、剣山、日本間、床の間のお花というイメージがあるのですが、今の生活様式では、日本間や床の間がない家もあります。それでもいけばなができることをデモンストレーションすると、「へえ、池坊さんのところはそういうこともやっています。す。」

大嶋 伝統に甘んじるのではなくて、臨機応変に現在の生活スタイルに合わせ、そこから何か新しいものを発信したいと言われているのだと思いますが、残さねばならないいけばなの真髄の部



◀ 京都大学ジュニアキャンパスは、中学生が学問の最先端に身近に触れて、楽しさ・面白さを感じることをとおして、感性を伸ばしたり、将来学びたいことを考えるきっかけになることを目指している。実験、工作、自然観察、天体観測などの体験型のゼミや、テキストをもとに議論をしたりするゼミなども用意している。

➡ 百周年時計台記念館の1階にある「ラ・トゥール」は一般の方も利用できるフレンチレストランで、人気がある。



分の伝統もあるように思いますが。池坊 そうですね。変わらない軸がかならずあります。

大嶋 何をキープして何を捨てるかという判断は、とてもむずかしいと思いますが。

池坊 今の時代だけに合わせたものを発信すると、別にそれは池坊である必要はないし、伝統文化である必要はないと思います。六百年続いてきたのは、その時代時代を生きた方々のいけばな、池坊に対する深い愛情と、自分の愛するいけばなをこの時代で終わらせてはいけない、次の時代に伝えていかなければならないという強い意志によるものだと思います。最後に残るのは伝えるものの強さだと思います。

入口をノックして もらう努力を

池坊 池坊にも変わらない生き方がたくさんありますが、その精神を変えることなく、今の時代の人たちのニーズをもプラスアルファして取り入れていきたいと考えています。古いものだけを「いいものなんですよ」と伝えるだけでは、時代にはそぐわなくなってしまう。いけばなへのきつかけは日本間、床の間でなくてもいいのですが、どんな入口から入っても、かならず伝統の領域に足を踏み入れてくださ

います。自分たちが信じる一歩のために、池坊だったらこんな見せ方もありますというように、いろいろな入口は提案していきたいと思えますし、その点は強調したいと思います。

大嶋 入口を工夫するというのは、京大はどうですか。

木谷 京大の魅力を発信していく一環として、受験生向けのオープンキャンパスもあれば、大学の講義やゼミを中学生向けに行なうジュニアキャンパスもあります。社会の中で経験を積んだシニアを対象に、学ぶ喜びをあらためて感じ取っていただけるよう、講義やゼミ、フィールドワークなど多様な学びの形態を取り入れたシニアキャンパスもあります。一般市民を対象に、各界で活躍する卒業生を招いて講演と質疑応答をする「京都大学未来フォーラム」も開催しています。この『紅萌』の刊行も発信の一つです。時計台のレストランには、ご近所の方に気軽に入っていただいていて新名所になっています。つねに敷居を低くする努力はしているつもりです。

池坊 そういう試みはおもしろいと思います。きつかけはレストランでもいいじゃないですか。レストランに行くために初めて京大構内に入って、こういうところで学びたいなと思ったりするのは、いいことだと思います。

いけばなを始めて、池坊は合わないなと思われても仕方がないと思います。やっぱり私とは合わないなと思われて

も、まず京都大学構内に足を踏み入れてくださることに意味があると思えます。「緑があるし、いいわ」「京都だし、いいわ」など、どんなきつかけでもいいと思うのです。でも、入った方は、こんな伝統があるんだとか、こんな一面もあるんだと、きつと思われれます。

大嶋 広報のあり方をお教えいただけたいと思います。ぜひ京大の広報に入っていただきたいですね（笑）。

木谷 尾池総長は、京大の教育は放任ではない、放牧だと言っています。放牧というのは結構大変なんだと。狭い厩舎の中で至れり尽くせりで全部与えるのではなくて、放し飼いにしておく。ただし、最終的に柵はちゃんと設けて、あちこちとんでもないところに行かないようにしなければいけません。いろいろな餌場、あるいは水場を用意して、行きたいと思ったら、ちゃんと行けるような環境を整備していく。結構手間がかかるけれども、それが必要だと言っています。

いけばなの世界でも、新しいことをやっていかなければいけない、かといって基本はきちんと教えなければならぬ。そのへんのバランスはどうですか。

池坊 私が華道の世界で生まれ育ったからだけではなくて、いけばなを愛し、次世代にも華道の精神を伝えていかなければという思いはすごく強いものがあります。これまでの時代も先代がそういう精神で継続しているから、微力

でも自分もかならず伝えていくという強い意志は持っていたと思います。

大嶋 何となく教師と共通するところがあります。研究も答えが見つからないので、たくさんの実験をしてもうまくいなくて、くじけそうになったときに、教師がくじけると学生もシウンとしてしまします。

研究者から見ても、いけばなの強みは、現実にリアリティーとして見せられ、美しいと感じさせることができることです。感じる人間に対して、魅力的に話して「やってみたら」と言えるのは、発信する上では強みだと思います。

池坊 でも、実際に見ていただくまでにはものすごい時間が必要なのです。例えば、今、高島屋でいけばな展をしています。でも、わざわざ高島屋に池坊の展覧会を見に行かれる方は少ないと思います。高島屋に行つて、そういえば池坊の展覧会があつたなと思いついて足を向けてくださる方がほとんどだと思います。

お茶は来客の接待があるから、男性でもやる方がいます。いけばなは女性だけのものだと思っておられる方が多かつたのですが、最近は団塊の世代のグループなど、男性でやってみたいと言つてくださる方が増えてきました。

十年前に京都の商工会議所から、せっかく京都にいるのだから男性によるお茶とお花とお香の会をしたいということで、百人ぐらいいらつしやいましたが、お花の応募者が一番少ない。



でも、私が生けたあとで、初めて見よう見まねでいけばなをされた方が、「男性でもできるんですね」「つくりあげていく過程がすごくおもしろいことに気がつきました」と言われました。一カ月たつて商工会議所から、「もう一回していただけませんか」との依頼があり、その会は二カ月に一回開催する同好会になって、はや十年がたちました。

団塊の世代で仕事一筋で、趣味がな

いことにふと気がついた男性にお花を教えると、すごく喜ばれます。皆さん勉強熱心です。いけばなの作品はきれいですが、つくりあげていく過程に喜びを感じないと続かないと思います。

向き合うのは人の心

大嶋 私たちも研究して論文を作成する過程が一番大変ですが、学生が自身の力でちよつとした成功を体験すると、ものすごく伸びます。

池坊 作品として、きれいだと思っていただけるのもすごく幸せですが。

大嶋 その過程が大事ですね。

池坊 きょう、この床の間には、『紅萌』十二号の刊行が秋なので、秋のイメージで生けました。用意しましたこの花器とこの花材を合わせるまでに、すごく悩みました。例えば、キキョウ三本のために十本ぐらい用意します。知らない方から見たら、ほぼ同じ表情の十本です。でも、ちよつとした表情の違いを見極めて三本を選ぶのは、自分の中で納得していく過程だと思っています。研究で

も、自分が納得することが大事なのではないでしょうか。

大嶋 ある意味で自己満足の世界ですが、ただ、そこにいたるまでには地道な努力があるのも事実です。

池坊 地道な努力、納得したうえで自分を表現するという面では、意外にも

学問と華道は近いと思います。いけばなはものと言わなければならないけれども、表現の一つだとも思います。時や場所で花材との出会いも違いますし、その場の心が

表現されることが多いので、心が乱れているとお花も落ちつきません。それがいけばなのおもしろさでもあると思うのですが。

大嶋 伝統にとらわれずにみずから発信していくというのは、家元の中ではかなりラジカルな考え方ではないでしょうか。

池坊 そうですね。

大嶋 池坊専永さんはいろいろなところで、次女だから多少ヤンチャしてもいいみたいなことを述べておられる。国立大学では長男が東大で、京大は次男ですから、ある意味でヤンチャしてもいい。そこも共通しますね(笑)。

池坊 お花をされたことがない方たち

の前でデモンストレーションをします

が、例えばバラが三輪あると、うちの

いけばなは、三輪きれいに咲いていて

も、一輪をより美しく見せるために二

輪を落とします。そういう省略の美、

空間の美は、日本人には伝わりやすい

のですが、海外にデモンストレーショ

ンに行くと、生きているお花をどうし

て落とすのかという質問がかならず出

ます。この二輪を捨てるのでなく、コサージュ(花飾り)にできないかとか、生かしてあげるお花の使い方については、海外では最後の最後まで納得するまで聞いてこられます。その点は、日本のほうがあいまいです。

大嶋 特に京都は白黒をつけないという文化ですから。私たちの研究でも、何となくこつちのほうがいいなとか、言葉では説明しにくいところがあつて、それを学生に伝えようとするものすごく時間がかかるので、これまでの経験から、私たちはすぐに「信じる」と言う。手を抜いているのかもしれないが(笑)。そのあたりも共通しているように思いました。

池坊 研究もいけばなも向き合うのは人の心なので、信じるという気持ち

は大切だと思います。こうしてお話をお伺いすると、これまでとは違った京都

大学像が浮かんでいますが、今まではなかなかほんとうの姿は見えませんでした。

大嶋 まだまだ敷居が高いですか(笑)。

池坊 高いと思います。優秀なだけではないプラスアルファの京大の魅力が、

なかなか見えないうちに思います。

木谷 すべての責任はこちらにあります(笑)。

二〇〇七年七月十一日

清風荘にて

◀ 園遊会と呼んでいた文化祭での平澤興（こう）総長。和気藹々としたふれあいの光景は園遊会の名物だった。『京都大学百年誌写真集』（1997年）より。

私 は一九五四年に入学以来、一九九七年に退職するまで、二年間の外国留学を除いて四十一年以上を京都大学とともに歩んだことになりました。また退職後もいろいろな形で関わってきましたので、いまだに生々しく「私の京都大学」は心の中でまだ熟成しておりません。

園遊会の名物

いろいろ考えましたが、やはり平澤興先生を語ることになりました。

平澤興先生にはじめてお会いしたのは、入学直後です。半世紀以上前になります。当時、医学部に入学するには医学部進学コースを受験し、二年後に医学科への試験をまた受けねばなりません。どのような理由でこんな制度にしたのかいまだにわかりません。おそらく、いったん入学させてそのまま専門へ進むようにすると、勉強しない者が出てくると思ったのでしょう。それで、定員の半分の五十名をまず入学させ、あとの半分は理系の他学部からもとるようにしたほうがよいと思っただけではないでしょうか。何とも愚かな制度だったと思いますが、案の定、この制度は四、五年で廃止になりました。

平澤興先生のこと 吉田 修

奈良県立医科大学長

しかし、この二年間はじつに楽しかったと思います。ささやかながら我が青春と呼べます。この時期は私の最も多感な文系の頭だと思いますが、小説など文学書ばかりを読み耽り、太宰治などにはまってしまいました。この影響は医学部へ進んでもからも続き、お陰で基礎医学の勉強がおろそかになり、後にそれを取り戻すのに倍以上の時間と努力を要しました。特に、憶えることしかないように思われた（これはとんでもない間違いですが）平澤先生の解剖学など、なかなかパスできませんでした。

平澤先生は京都大学分校主事（のちの

教養部長）をされていたこともあり、われわれ学生とできるだけ接する機会を持たれました。文化祭（園遊会と呼んでいましたが）のときなど、ビールのジョッキを片手に先生を中心に芝生の上で楽しい輪ができ、先生のいろいろなお話に感動したものです。先生は隣にいる学生の顔を抱え込みホッペタにキスされたり、ほおずりされたりしました。学生は逃げ回っていましたが、それでも嬉しそうでした。なかには失礼にも先生のピカピカ光っている頭をビシヤリとたたいた怪しからぬ者もいましたが、先生はニコニコ笑っておられました。

お元気ですか

先生は京都大学総長をされたあと、一九七五年第十九回日本医学公認会の会頭を務められました。その開会式は、「反医学公認会」を名乗るグループにより潰されてしまいました。そのうわさは事前からありましたが、その対策もなく開会式を挙行し、不成功に終わったことに対する平澤先生への批判もありました。しかし、先生はいかなることがあろうとも、若者を信じる姿勢を崩されなかったのです。この総会のテーマは、シュワイツァー博士の「生命への畏敬」でした。私

は、先生とシュワイツァー博士の思想に、共通点を見出してあります。

先生は、論語の「一以貫之」をよく引用されておられます。この受け取り方はいろいろあってもよいと思います。終始一貫信念を貫くと解釈してもよいし、「師が吾が道、一を以て之を貫く」といわれたその道とは、思い遣りと慈しみの心である忠恕（真心）なのだ」と解釈してもよいでしょう。いずれにしてもこの言葉は、平澤先生に最もふさわしいものだと思います。

「八十を過ぎないとわからないことも、人生にはあるものだ」と晩年になつていわれたことがあります。私は現在七十二歳、そろそろ人生の出口が見えてきました。歳をとるにしたがつて先生の偉大さがより理解できるようになり、平澤先生への敬慕の念はますます募ってきます。

昨年（二〇〇六年）の秋、鹿ヶ谷の法然院にある先生のお墓に参ったとき思わず、「先生、お久しぶりです。お元気でですか」といい、同行の友人に「お元気ですかないだろう」と笑われました。後日、梶田真章住職にこの話をしたら「いや、それは私の御心に叶うものです」とのこと、大変嬉しく思いました。



■ よしだ おさむ
1960年 京都大学医学部卒業
1968年 米国ウィスコンシン大学
臨床腫瘍学講座客員研究員
1973年 京都大学医学部教授
1993年 京都大学医学部附属病院長
1997年 京都大学名誉教授
2001年 現職
専攻：泌尿器科学

このたび、「心の中の京都大学」というテーマでの原稿の依頼を安易に引き受けたのであるが、よく考えると、私はあまり適任ではないのではと危惧する。大学入学から十三年あまり、少しずつ身分を変えつつもずっと本学に在籍している私にとって、京都大学はいまだ「心の中の」存在ではなく、日々の生活の一部であり続けているからだ。つまり、私は内から本学を見た経験しか有していない。さらに、学部、大学院と同じ研究室で学び、現在もその講座に属しているため、私がよく知っている本学は、東一条通と近衛通に挟まれた狭い部分（現在の吉田南構内）でしかない。したがって、私が書くことができるのは、ここ十年あまりにおける京都大学、特に吉田南構内についてであることをあらかじめお断わりしておく。

空間的・視覚的な変化

まず、本学における私の履歴に少し触れさせていただく。私は一九九四（平成六）年に総合人間学部（以下、総人）の二期生として入学したのであるが、なぜこの設立間もない学部を選んだのかと改めて思い起こしてみると、いろいろな理

由があるにせよ、その「曖昧さ」に惹かれたといえる。学部名称からして何を学ぶのか得体の知れない点、旧教養部を母体とするため文理さまざまな学問領域を専門とする教員が在籍している点など、他学部とは異なる印象であった。あれもこれも学びたいと欲張りであった私にとって、何が学べるのかわからない総人には、換言するならば、何でも学べそうな魅力があった。文明論や国際関係論など、さまざまな学問分野に興味を抱きつつも、最終的には生活空間構造論研究室を選択し、山田誠教授をはじめとして、人文地理学や建築学を専門とする先生方の指導を仰いだ。

私が大学に入学して以降、大学院重点化に伴う組織の改編や専門職大学院の設置、あるいは国立大学法人化など大学を取り巻く環境は社会的に大きく変化してきたが、本学も例外ではなかった。組織上の変化とともに、大学キャンパス全域で建物の改装や改築が行なわれるなど空間的・視覚的にも様変わりしてきたと感じられる。最も大きな変化は桂キャンパスが建設されたことであるが、吉田キャンパス内の変化も著しい。本学のシンボルである時計台や楠の周辺は整備され、

京都大学、ここ十年の変化

小原丈明

京都大学大学院人間・環境学研究科助教



◀ 修士課程修了式後、山田教授（中央）の研究室での記念写真。左が筆者、右は同期の劉さん（現・天津師範大学）。

また公用車の車庫であった建物はカフェレストランにリノベーションされ、常賑わいをみせている。

東一条通より南側を見ても、ここ十年の間に人環（人間・環境学研究科）棟や総人棟、一号館、学術情報メディアセンタールが新設され、総合館（旧A号館）などが改修された。なかでも大きく変貌を遂げたのは（吉田南構内の）正門前から旧A号館にかけての空間であろう。従前は自転車等で混雑していた場所が、今ではオープンスペースとして整備された。ただし、賛否両論あったが、かつての名物であり、ある種京都大学らしさを醸し出していた折田彦市先生像が撤去されてしまったのは残念である。

お洒落で真面目な学生

私にとって、組織や建物以上に大きく変化してきた印象を受けるのは学生である。端的に言えば、世間一般でいうお洒落な学生が増えた。かつては服装など外見をそれほど気に掛けない、いわゆる「イカ京」（いかにも京大生の略）と呼ばれる学生が多かったと記憶しているが、近年ではそのような学生は希少な存在となっている。「イカ京」とは言わないまま

も、私もあまり外見に頓着しない性格であるから、学内ですでに少数派であるのかもしれない。

その上、外見だけでなく学生の気質も変わり、真面目な学生が増えたのではないかと思う。全学共通科目の受講生が多い吉田南構内では、以前は履修登録後に人口密度が下がったが、ここ近年では常に人が多い。講義に真面目に出席する学生が増えていると思われる。

これら学生の変化は相互に関連しているのではなからうか。お洒落で真面目な学生の増加は喜ばしいことである反面、強烈な個性を放つ学生が少なくなってきたことの裏返しかと思われる。個性豊かな人材により京都大学が支えられてきた歴史を慮ると、少々寂しい気がする。このような私の印象は、本学をより長いスパンで考えた場合、あるいは外から見た場合には必ずしも当たっていないのかもしれない。

現在も大学は変化の渦中にある。これらの変化がどういった意味を持つものであるのかを評価するのは、まだ先の話である。その時点においても依然として京都大学らしさが残り、個性豊かな人材が育てていることを切に願う。

■こはら たけあき
1998年 京都大学総合人間学部卒業
2006年 同大学院人間・環境学研究科博士課程修了
2007年 現職
専攻：人文地理学

地域研究という試みが興味深いのは、地域もしくは地域における事象・出来事を、総合的に理解しようとする点にある。既存の学問が、研究対象を生態、社会、文化といった局面に分け、その鋭い切り口で分析してみせるのとは異なり、地域研究は、地域そのものや地域の事象・出来事を、全体として把握する。

とはいっても、これまでの学問が蓄積してきた生態、社会、文化といった概念を使わずに、どのようにして地域や地域の事象・出来事を理解できるのだろうか。私たちがいま考えているのは、B・ラトゥール(B. Latour)やM・カロン(M. Callon)などが提起しているアクター・ネットワーク論とその手法を、地域研究に応用することである。

本来、アクター・ネットワーク論は、科学技術が作りだされる過程をフィードバックによって明らかにし、そこに登場する人とモノ（技術、機械、自然物など）の異種の「アクター」からなる流動的なネットワークの連鎖が、最終的に安定したものになり、新しい法則や技術となるとする。私たちもこれにならって、地域や地域での事象・出来事を、生態、社会、文化の間の相乗作用や相互入れ子構造としてではなく、人とモノが作り出すネットワークの連鎖の結果として見てみようというのである。

人とモノの ネットワークから 地域を見る

研究の最前線から アジア・アフリカ地域研究研究科

足立明
アジア・アフリカ地域研究研究科教授



■あだち あきら
1977年 京都大学工学部卒業
1986年 スリランカ・ペラデニヤ大学
文学研究科修士課程修了
1986年 京都大学東南アジア研究センター研修員
1989年 北海道大学文学部助教授
1996年 北海道大学文学部教授
2000年 現職

人とモノのネットワークとはどのようなものか。例えば、日本では、歩行者は右側通行をし、車は左側通行をしている。それでは、なぜこのような道路交通のあり方が成立するのか。この問いを学生にすると、「法律で決まっているから、当たり前でしょ」という答えがすぐにかえってくる。しかし、実際に道路に出て観察してみると、交通規則のみが道路交通を律しているのではなく、多くの人とモノのネットワークによっていることがわかる。

ヒューマン・エージェンシー

もちろん、種明かしをすれば、「なんだそうか」とだれでも納得する。



当たり前なのである。しかしここで注意したいことは、道路交通のあり方が安定し、ほとんど意識されずにそれが遵守できているときには、そのプロセスやメカニズムが当たり前のものであって忘れ去られてしまっている点である。つまり、規則があるからそれが守られているにすぎない、と多くの者が思いこんでしまう。そして、人とモノのネットワークが安定し、意識せずに維持できるとき、それらのネットワーク（関わり合いの束）は人々の記憶から消え、なにか適当な原因と結果の対応（ここでは、規則＝道路交通の維持）として人々に理解される。そのとき、この適当な対応関係が、われわれにとつての「事実」（ブラックボックス）となるのである。

このような見方で私たちを取り巻く世界を見ていくと、事象や出来事は、さまざまなネットワークが幾重にも重なったものとしてとらえられる。そこには、生成過程のネットワーク、「事実」として純化されたネットワーク、変容し消滅しつつあるネットワークなどが錯綜している。そのため、事象や出来事を総合

的に理解するためには、人とモノの流動的なネットワークをとらえつつ、そこにできた「事実」を開け、そのネットワークのありようを把握することが重要になってくる。これがアクター・ネットワーク論の興味深い点である。つまり、世界を、「事実」にもとづいて理解すると同時に、「事実」が生まれてくる過程や条件にも目を向けようとするのである。

ところで、このようなネットワークにおいて人とはどのような存在であらうか。ここでの人とは、行為し、考え、感情を経験するヒューマン・エージェンシー（能力、可能性、素質）をもった存在である。しかし、このようなエージェンシーは、人や人の相互作用から生まれるものではない。それはモノと特有のネットワークを形成したときだけに生まれる。

それでは、モノとはどのような存在であらうか。ここでのモノとは、書物、画像、機械、分子、岩、銀河系といった〈物質―記号〉としての実在物である。これらのモノは、それ自体で多様なアフォーダンス（力、素質、可能性）をもち、人がモノとの関わりをもつ際に、一連の行為を予期させ、それを可能にさせる。それぞれの石にはさまざまなアフォーダンスがあり、砂漠にある石は人に神を経験させることもできるし、平たい石なら人が休息することもでき

る。つまり、ヒューマン・エージェンシーは、人とモノとの間に生まれるのである。そして、人とモノのネットワークによって、これらのヒューマン・エージェンシーは多様に変化する。

いずれにせよ、私たちは、フィールドワークをおして、地域における人とモノのネットワークを、過去や、地域以外のネットワークとつなげることで、地域の事象や出来事を記述し、理解しようとしている。

村落開発という出来事

それでは右記のような視点から開発という出来事を考えると、どのようなになるのか。例えば、グラミン銀行[※]を考えてみよう。グラミン銀行は、バングラデシュという特定の地域で偶発的に成立したネットワークである。その成立過程では、さまざまな人とモノが取り込まれ、大小さまざまなネットワークが生みだされつつ、一部は安定し、他のものは消滅・変容し合いながら、全体として安定したネットワークを作りあげてきた。しかし、ひとたび比較的安定したネットワークとなったグラミン銀行は、その複雑な成立過程に言及されることなく、天才的創業者と、自立しようとする村の女性、それに呼応せざるをえなくなった夫たちといった、限られた登場人物の結果として、



↑ スリランカの村落金融の窓口。

→ 交通は、交通規則のみならず、それを取り締まる警官の視線、人々の目、交通安全ポスター、さらには、道路の歩道や中央分離帯の物理的構造、車のハンドルの位置といったさまざまな人とモノが作用し合いながら、現実の道路交通のありようが決まっている。京都の百万遍の交差点。

その「成功」が「説明」され、それが「事実」として定着してくるようになった。

そして、その「事実」の下に忘れられた偶発的な過程や、視界から消えてしまった人やモノの存在を明らかにすることなく、「事実」のみを他の地域に適用し、南アジアの「グラミン銀行化」が進行してきた。というのも、開発業界や政府、開発援助機関は、それぞれに開発政策に関する目的や利害を異にしていたにもかかわらず、グラミン銀行モデルを採用するということで、ばらばらな目的や利害を、共通のものとして「翻訳」することに成功したからである。

ところで、すべての安定化した人とモノのネットワークは、ある地域から別の地域に移動が可能であろうか。例えば、ボーイング777型機は、その形を保ったまま何千キロも

の移動が可能である。ただし、各地の空港が管制官や給油施設と安定的にネットワークを保っている限りである。しかし、グラミン銀行のように、バングラデシュのさまざまな地域の人とモノとのネットワークで何とか安定化してきたものを、いくら専門家などの人的資源と銀行経営マニユアルを移動させても、移動先のさまざまな人とモノをどのように取り込むかによって、その命運は大きく変わる。とすると、移動したグラミン銀行の命運はどうなったのだろうか。

スリランカ^{※2}には、一九八〇年代の後半から九〇年代にかけて、グラミン銀行モデルが輸入された。私は、グラミン銀行モデルを柱にした「ジャナサビヤ（人民の力）」計画について調査をしたことがある。最初の「ジャナサビヤ」計画は低利の資金貸与による「起業家」の育成を目的とし、カトリック神父によって始められたが、数年で頓挫した。その後、その内容を変えながら政府のプロジェクトになり、そこにIMFやNGOが絡み、最終的に大統領の暗殺・政権交代とともに終息するとい

↓ 借りた資金で、ビーディという簡易煙草を作る。収益は少ない。スリランカ。



う、きわめて偶発的な過程をみた。

村落における事例研究でも、「貧困世帯」の名簿、資金貸与のための通帳、集会場、出納帳、「起業家」になるためのマニュアルといったモノや、プロジェクトの対象者である資金受給者から構成する五人組、プロジェクトマネージャーといった人

それにこのような人とモノのネットワークで行われる集会、受給世帯の籌作り、お菓子作りなどの過程を追った。しかし調査村では、有効な人とモノのネットワーク形成は維持できず、資金が止まったあとは消滅した。その理由は、明らかに、本家のグラミン銀行のネットワークと同じものが、そのまま場所を移動して成立するということはまず考えられないからである。そして、「起業家」としてのヒューマン・エージェンシーは、スリランカにおいて関係づけられた人とモノの間では生まれなかった。

構造調整で生じた最貧層の増加を、「起業家」というエージェンシーをもった農民を生み出すことで乗り切ろうとするこの是非は別にして、ここでの問題は、どのような新たな人やモノを関係づけ、どのような人やモノをはずせば、バングラデシュという地域以外に安定的な村落金融というネットワークを維持できるかという点である。ただし、これを

考える際に、開発計画とその実践にのみ焦点を当て、それ以外のネットワークを無視してしまつては何も見えてはこない。例えば、村落とその農業景観全体が、その総体として村人のヒューマン・エージェンシーを活性化させる可能性をもつ重要なモノの集まりである。

安藤和雄（東南アジア研究所准教授）は、バングラデシュの農村の隅に捨てられた近代的農機具や伝統的な農機具を見ながら、それから新たな農機具を作りだす器用仕事が生まれることを報告している。また、かつて主食であつた雑穀や作物が農耕儀礼にのみ用いられるようになって、それらは過去をよみがえらせ、記憶に残し、村人が現在を考える重要な参照点にもなる。つまり、新しい高収量品種が持ち込まれた現在を考える参照点として重要なモノとなりうるのである。言いかえれば、開発計画が持ち込まれている際でも、その計画に知らず知らずのうちに関係をもつ計画以外の人とモノのネットワークにも目を向け、村落内のさまざまなモノが、彼らの力を維持し高める現場を見いだし、記録することが必要となる。

しかし、開発援助機関は、始め（計画立案）と終わり（評価）のみを記録し、その実施過程はほとんど記録しない。プロジェクトの成功と失敗



↑ 仏陀が悟りを開いたという菩提樹がインドからもたらされ、スリランカ全域に広がったとされている。聖なる木としてさまざまな仏教儀礼が行なわれる。



↑ 最近建立された、仏陀の座像。



← 仏に供えられる供物。花は、朝は美しく香り高いが、夕方には萎んでしまうということをいつも自覚するために供えるという。

は、しばしば当該社会の文化や政治的腐敗の問題であり、プロジェクトのマネージメントにはないという結論を出す。そのため、開発といった出来事を、人とモノのネットワークの変容として詳細を記録することは、何が欠けていたかを考える重要な資料になる。ただし、それは「客観的」過程の記録である必要はない。というのも、異なつた興味・利害や解釈・枠組みが異なるさまざまな登場人物が、それぞれに解釈し、彼らの間の交渉・競合の場での資料の一つとして利用すればよい

いとするのである。そして、このような「プロセス・ドキュメンテーション」をとおして、これまでのアカデミックな地域研究者と、開発実践に参加するさまざまな人々との意見交換を行ない、開発実践への貢献にもつながるのである。

★ グラミン銀行はバングラデシュの首都ダッカに本部をおき、貧困層を対象にした低金利の無担保融資を行なう「貧者の銀行」として知られている。女性を中心に五〇〇万人以上に貸し付けを実施。顧客五人による互助グループがつくれ、それ

それが他の四人の返済に関して責任を負う必要がある。二〇〇六年、創設者のムハマド・ユヌスとグラミン銀行は、ノーベル平和賞を受賞した。受賞理由は「底辺からの経済的および社会的発展の創造に対する努力」である。

＊2スリランカの人口二〇〇万人近くの四分の三はシンハラ語を母語とするシンハラ人で、その多くが仏教徒でキリスト教徒もいる。残りが北部を中心に住むタミル人で、ヒンドゥー教徒やキリスト教徒である。その他に、イスラーム教徒も居住している。

宗教におけるモノ

人とモノのネットワークという見方は、科学技術や開発実践にのみ適用できるのではない。最近、私たちの研究室を中心に、宗教実践におけるモノ（物質・記号）に着目した研究を始めている。多神教的な仏教とヒンドゥー教、そして一神教で偶像崇拜を禁じているイスラームをとりあげ、そこに関わるさまざまな人や、教典、儀礼的事物、寺院、都市構造といったモノとの関わりを記述しようとしている。

私たちは、仏教や仏というものは心の問題として考えがちである。また学問的には、仏教というものを、教義やそれに関わる宇宙観、さらに

は仏教的な実践の規則といった觀念体系として理解しがちであった。しかし、このような教義や宇宙観、觀念体系は、現実にはフワフワと浮かんでいるわけではない。仏教とは、それらを習得した人々の身体と、寺院のさまざまな構造や、家の仏壇、仏教の標語を書いた看板、犬や鳥のために取り分けられた食物といったものの中にも埋め込まれ、分散しているといつてよい。言いかえれば、仏教という信仰は、さまざまな人やモノに埋め込まれ、分散し、そこにできあがる人とモノのネットワークが首尾よく安定したときに初めて、仏教が実在し、仏教徒というエージェンシーも同時に生まれるのである。

私たちが寺院や神殿を訪れたときに感じる強い力や感動は、このような異種混交のネットワークが私たちを取り込み、その中で相互に働く作用性によって起こる感覚であらう。

しかし、そのようなネットワークが安定化すると、さまざまなモノは視界から消え、私と仏のみが意識される。もしくは仏の心のみが焦点化される。しかし、それ以外のモノが作用を止めているわけではない。科学者は、自然の法則を見いだす際に、検出器、計算機、図表、ディスプレイなどの多くのモノをおとして自然を数字や図像に翻訳し、最終的に法則を見いだす。この際に、このよ

↓モスクに併設されたイスラーム学校で、クルアーン（コーラン）を学ぶ。



うなモノが多く、それもうまく配置されたときにより正確に自然を把握することができる。しかし、ひとつが法則が確定すると、自然と法則のみを結びつけ、それらの間のモノを忘れてしまう。それと同じように、宗教においても、さまざまなモノの介在がうまくゆけばゆくほど、より強く神や仏に触れることができる。私たちは、ヒンドゥー世界とイスラーム世界における宗教の物質性をめぐる事例を比較することで、宗教をめぐる人とモノにおける地域性を明らかにしたいと思っている。

地域研究という場所

領域横断的研究や文理融合がさげばれて久しい。しかし、これまでの学問が自然と社会、人とモノ、科学と宗教といった棲み分けを行ない、自然、社会、文化といった安定した世界を作ってきた。そのため、それらを崩さず横断的な研究を行なう

のは至難の業である。特定の文脈を設定して、自然と社会、自然と文化、社会と文化といった裂け目をアクロバティックに飛びつかない。しかし、すでに述べたように、私たちの前に広がる世界には、人とモノのネットワークであり、ネットワーク的な見方は最初から「領域横断」であり「文理融合」である。

もつともネットワーク的な見方は、きわめて冗長であり、時間のかかるフィールドワークを経なければ実践できない「効率」の悪い方法である。既存の学問は、棲み分けすることで、原因と結果を素早く結びつけるが、ネットワーク的なやり方は、多くの原因と多くの結果を記述するだけで、「犯人捜し」は得意でない。この意味で、近代的な学問が西洋医学とすれば、ネットワーク的な見方は漢方やアーユルヴェーダ医学のようなものであらう。西洋医学が捨象したさまざまな関係を見つけたし補完するものである。

いずれにせよ、ネットワーク的なものの見方にとって、地域研究という場所は居心地のよい場所である。それは地域研究というディシプリンがないからであり、特定のディシプリンに還元して、物事を考えなくてよいからである。今後、このような場所を確保し充実していきたいものである。

→ヒンドゥー教寺院。ココナツ、線香、花、果物などが供えられ、司祭の導きで神の祝福を受ける。

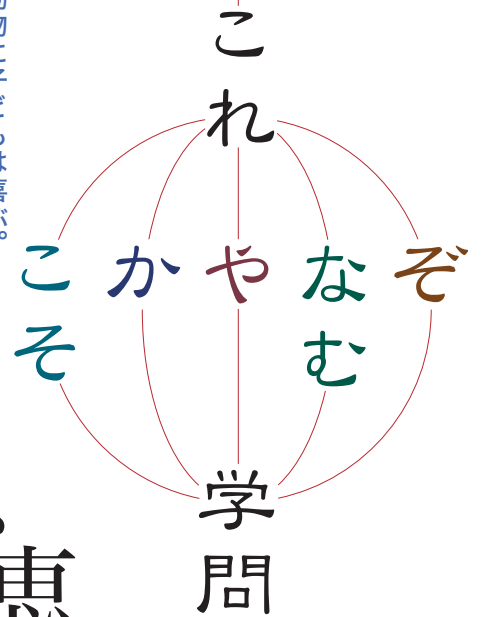


絵本では動物がよく登場する。そこに描かれた動物に子どもは喜ぶ。そうした動物にかかわることは、子どもにとってどんな意味があるのだろうか。どうやら、動物と人間の根源的な関係のありようが、動物絵本には示されているようだ。そのような動物絵本の研究によって、人間が人間らしく生きていくためには動物という存在が不可欠な理由が明らかとなる。

編集部 子ども時代に動物が登場する絵本を読むことをとおして、「動物との出会いを必要とする人間とは何か」を問われた『動物絵本をめぐる冒険——動物・人間学のレッスン』（勁草書房 二〇〇二年）の執筆の動機はどのあたりにあるのでしょうか。

矢野 子育てをしていて、子どもが最初に出会う絵本が、ミッフィーの絵本のように、なぜ人間でなくウサギなどの動物が主人公の絵本なのか、私には不思議に思えました。また娘が小学四年生のときに犬を飼いたがって、結局犬を飼うために自宅を購入しました。動物と人間との関係はいつたい何だろうかと思ったのがきっかけです。

私たちはなぜ動物絵本を読むのだろうか。



動物とかかわり、 広がる生きる知恵

矢野智司

教育学研究科教授に学問観・人生観を聞く

雑駁な言い方をすれば、生まれたばかりの赤ちゃんは動物状態でまだ人間ではないので、動物状態を否定して人間に変えることが教育だと言われています。ところが、幼児がもっている人間ならざる感触には、生き生きした不思議な魅力があります。それは、私たちが動物と出会ったときの魅力ともつながっていて、人間でないものに出会う喜びがあります。この本では社会学者の作田啓一先生の言葉を借りて「溶解体験」という言い方をしていますが、環境と連続して生きている、世界と一体化するのが動物状態なのだろうと思います。人間になるということは、環境との間に境界線をつくって、私という意識をもつことです。意識をもつて世界との間に境界線をつくることで、日常生活や仕事を支えているわけです。一方で、酒を飲むことも、カラオケで唄うこともそうですが、人間はあえて自他の境界線を破壊して、自他融合の喜びの瞬間を生ぎようとしています。人間的なあり方を否定して動物状態に



■やの さとし
1977年 京都大学教育学部卒業
1981年 同大学院教育学研究科博士課程中退
1988年 香川大学助教授
1992年 京都大学助教授
2002年 現職

立ち戻る、人間を脱していこうとする（超えていく）強い力が、人間の生にはあります。合理的計算や損得の功利の世界とは別に、こうした芸術や遊びの世界（この他にも供養、蕩尽、虐待、エロティシズムなどをあげることができ）があることで、人間としての営みのダイナミズムが生まれてきます。じつは、教育にもこの二つの面があるとは考えています。

「発達としての教育」と「生成としての教育」



矢野 教育学という分野は近代になって生まれるのですが、動物状態の子どもを人間にすることを中心に考えられています。教育学では、これを「発達」と呼んでいます。共同体のなかで認められている価値を実現する能力の増大・拡張が、発達です。学校はこの人間化の使命をになっています。「人間化」するプロセスの企ては「発達としての教育」と呼ぶことができ、このことが重要なのは言うまでもありません。しかし、「発達としての教育」だけに目をむけると、子どもは共同体の道具になってしまします。

しかしもう一つ、溶解体験をする「脱人間化」の側面もあるのが教育だと私は思うのです。「脱人間化」は、人間の原初に立ち返る「生成としての教育」と言えます。ただ、この側面は自他が融合してしまい対象化できない、概念的な用語では言語化できないのです。

遊びに夢中になっているときは、遊んでいるとは意識しません。「私は遊んでいるんだ」と意識したときには、すでに遊びの輪からははずれています。ですから、溶解する脱人間化の体験のありようは、なかなか学問になりにくいのです。

編集部 教育学が近代になって誕生したのは、国民国家の形成、公教育の普及と関係しているのでしょうか。

矢野 そのとおりです。そのことも「生成としての教育」を十分に捉えることができなかった理由の一つです。遊びが教育に入ってきたときに教育学者がどう考えるのかというと、遊びは発達にどう役立つか、遊びを発達にどう利用するかです。仲間意識やコミュニケーション能力を高めたり、運動能力を高めたり、結果として発達がおきるのは確かです。その面を重視するため、「めまいの遊び」「賭けの遊び」は教育的でないとして、あまり評価しませんでした。

編集部 「めまいの遊び」とは何でしょう。

矢野 例えばブランコ遊びだとか、幼児だと自分のからだをくるくる回すような遊びです。大人になると、わざわざお金を払ってジェットコースターに乗ったりします。「賭けの遊び」はビー玉やメンコ遊びです。発達とつながらないから、そして賭けは反社会的だから、学校では禁止されています。このように、教育者が遊びを発達だけから

見ていくと、遊びは縮小の方向に向かいます。脱人間化の理論がないわけですから。

溶解体験は生きている感触そのもの、ある種のエクスタシーの体験ですが、世界の全体に触れる体験というこゝとは人間にとって根幹的なものです。動物の問題はここにかかわってきます。子どもが動物に触れると、人間の世界でない野生の世界（外部）に触れる可能性に開かれていきます。動物は言葉をしゃべりません。言葉の世界に生きているいいからいいのです。言葉によって傷つけられた子どもは、言葉の外の世界で癒されます。

『くまさん』（レイモンド・ブリッグズ作、角野栄子訳 小学館 一九九四年）を見てみましょう。女の子が寝ていると、大きな黒い影が姿を現わします。白熊なのですが、女の子には見えても、親にはその姿を見ることはできません。熊はそそうをしたりしますが、女の子は面倒をみます。お母さんのすぐそばに熊がいても、お母さんは気がつきません。女の子は熊さん大好き、と一一緒に寝ますが、来たときと同様、翌朝、突然、熊は姿を消します。

人間世界（合理と功利の世界）の外から、熊は理由もなしにやってきます。私は熊は贈与として野生の世界からやってくるのだと思います。人間の日常生活の中に生命そのものが理由もなく侵入してきて、何もしゃべらず、そのまま帰っていく。この絵本は人間世界の

原理を破壊しながら、野生の世界に子どもを誘う構造になっています。

動物絵本は、何万年もかけて積み重ねてきた動物との関係にかかわる知恵を描いていると思います。物質文明のなかで、人間関係がダイナミズムを失うほど、外の動物世界にそこが来ます。動物をテーマとしたテレビ番組が人気があるのも、ペットを飼ったりするのも、そのあたりに理由があるように思



『くまさん』（レイモンド・ブリッグズ作、角野栄子訳 小学館 1994年）の一場面

います。

編集部 人間世界が動物によって活性化されるわけでしょうか。

矢野 活性化される、と言ってしまふと、人間中心主義になつてしまいます。ここがポイントです。だから動物を飼いましよう、という飼ひ方をするのはまちがいだと思います。人間が有能に生きていくのに、たまには野生の世界も必要です、という「動物性から人間化へ」の発想にたっているからです。こうした動物の手段化は、生命との繊細なかわりを破壊してしまい、脱人間化へと開く力を奪つてしまうからです。

編集部 絵本で家畜は描かれるのでしょうか。

矢野 家畜は基本的に人間世界に属しています。動物絵本で、登場する動物を何にするかは重要です。『くまさん』のように、外部から野生の風を吹き込もうとすると、登場する動物は家畜ではなく熊ぐらいでなければ、豚や牛ではインパクトがありません。ただ、家畜を描く絵本がないわけではありませんが、家畜だと野生の面が弱く優しくなります。

『おかあさんだいすき』（マージョリー・フラック作、光吉夏弥訳、岩波書店一九五四年）では、お母さんの誕生日のプレゼントに何がいいかと男の子は家畜に聞きます。雌鶏は卵、ガチョウは羽、山羊は乳、羊は毛、雌牛は乳がいいだろうと言う。みんな役に立つ、有用なものを言うわけです。けれども、

どこか思っているものにびつたりこないで、男の子は（人間の土地ではない）森に出かけ、熊に聞こうとします。家畜は森へは行きたがらないので、一人で行きます。熊は素敵なプレゼントを教えてくださいました。ダニーは、「おかあさんのくびにぎゅつとだきつきました」。

「そうやってほおずりしてあげるの、いちばんいいおくりものだよ」と、くまさんがおしえてくれたからでした。熊のレッスンは、交換にならない愛の技法です。

子どもが野生の危ない世界に行つて戻つてくるのは、動物絵本の基本構造で、野生の世界を体験するイニシエーション（通過儀礼）を描いていると言えます。

編集部 先生が教育学へ進むうとされ、たきつかけは、どのあたりにあるのでしょうか。

矢野 思想や哲学の本を読むのが好きだからという理由で大学院に進学したのですが、博士課程に進学して、自分が教育哲学を研究する意味を見失つてしまいました。ちょうどそんなとき先輩からの誘いもあり、福岡県の幼稚園の近所に部屋を借りて二カ月ほど毎日かよいました。子どもを研究するといった明確な目的があつたわけでもなく、毎日、朝から夕方までひたすら子どもと一緒に遊ぶだけでしたが、子どもと接しているうちに、子どもが成長（発達と生成）していくことの不思議さに強くうたれました。本当に子

どもはすごいと思ひました。そしてまた、子どもの成長にかかわる者の責任についても深く考えるようになりました。このことが自分にとって、学問としての教育哲学研究から、生成と結びついて教育を哲学することへの転換点だったのだと思います。

「逆擬人法」で描く賢治の作品世界



編集部 『動物絵本をめぐる冒険』で先生は、人間を優位におくキリスト教的な自然観、進化的な自然観を批判されています。

矢野 近刊予定の『贈与と交換の教育人間学——漱石と賢治における贈与と死のレッスン』（東京大学出版会）のなかで、宮沢賢治（一八九六—一九三三年）の作品をいくつかととりあげ、贈与と生命倫理について論じています。賢治の作品は、なかなか読みにくく、一回読んだくらいではわかりづらいところがあります。確かに心は揺すぶられるのですが、いったい何を書いているのかがよくわからないのです。どんな物語ともちがう不思議な作り方になっています。その理由の一つは、賢治の擬人法にあると思います。

ふつう言われている擬人法は、人間が人間のわからないものを自分のものに解消することです。野生動物が家畜になるように、人間の仲間になることです。例えば、オオカミにメガネをかければ人間化し、理解できる存在になります。そのときに擬人化されたものは、人間を超えた特性を失つてしまうのです。動物が登場する物語や絵本の多くは、この擬人法によって作られています。動物が人間世界に取り込まれていくのです。

ところが、賢治の作品は、そのようには作られていません。人間が動物世界へ生命の世界のほうへ呑み込まれていく構造になっています。

「雪渡り」という作品があります。

雪におおわれた北国の冬が舞台で、「雪がすつかり凍つて大理石よりも堅くなり」「い

つもは歩けない黍の畑

の中でも、すすき

で一杯だった野

原の上でも、す

きな方へどこ迄でも

行けるのです」。四郎と



『おかあさんだいすき』（マージョリー・フラック作、光吉夏弥訳、岩波書店一九五四年）の4場面。人間が住んでいる安全な世界と、人間の外的世界である森には大きな断絶（距離）があり、人間が森を恐れているようですが、この一連の場面ではよく描かれている。人間に近い家畜は行きたがらないが、ダニーは意を決して森に向かう。

かん子が森の近くで「堅雪かんこ、凍み雪しんこ」と高く叫んでいると、白い狐の子が出てきます。積雪で境界がなくなっている状態で狐が人間のところにやってくるわけです。そこで、狐から幻燈会の招待状をもらいます。贈与を受けるわけです。しかし十二歳以上はお断わりと言われ、三人のお兄さんは参加できません。四郎とかん子は狐から歓待され幻燈会を見ての帰り道です。「その青白い雪の野原のまん中で三人の黒い影が向ふから来るのを見ました。それは迎ひに来た兄さん達でした」。人間が黒い影に見えるのは、狐の世界です。二人が狐の目になっているからです。人間の世界に戻った瞬間、「それは迎ひに来た兄さん達」だとわかるのです。

年齢が低いと、動物の世界に行つたときに、向こうの世界の住人になれることを示唆しています。これは、「逆擬人法」と言えるのではないかと考えたわけです。賢治の心象スケッチとはそのような生命世界を体験し、それを表現する生の技法といふことができます。

「動物の権利」という議論、なぜ、動物に権利があるのかを考えると、霊長類は人間と同じように思考することができる、喜んだり悲しんだりすることができるからだと主張する人がいます。しかし私は、これは擬人法と同様の人間中心主義だと思えます。「動物の権利」という考え方は聖書の「ノアの方舟」に描かれた動物観と同じ原理です。

「ノアの方舟」をおりるときに、人間は神様からまた、権利をもらつて動物全体の保護者となつていくからです。賢治的な自然観・動物観を考えることで、これからの人間と動物の相互関係の新しい可能性、新しい生命倫理の可能性が開けてくるように思います。

純粹贈与者としての先生 ツアラトウストラ



編集部 『贈与と交換の教育人間学』のタイトルにある「交換」とはどういうことでしょうか。

矢野 共同体の外から贈与する先生がやってくるのが、「生成としての教育」の出発点です。ソクラテスやイエスやニーチェのツアラトウストラのように、共同体から出て沙漠や山の中に行き、死に触れる体験をします。山でツアラトウストラは太陽から恵みを受けます。その贈与に自分が満ち満ちたから、今度は共同体に贈与するわけです。ソクラテスが広場に立つのも、見返りのためではなく、溢れるものを贈与したいからなのです。最後には供儀として自身を贈与するのです。いつさいの見返りを求めない、純粹贈与です。ソクラテスとの対話によつて今まで当たり前前だと思つていた世界が揺らいでいく、破壊されていく。ソクラテスが新しい思想をもつてくるのではなく、彼の話揺るがされた人間が溶解体験を経て、知のありようを変えていきます。それは暴力的側面をもっており、

危険なことでもあるのですが。

共同体は貸し借り、恩や義理、あるいは市場での等価交換などさまざまな形態の交換で成り立っています。市場交換のレベルもあれば贈与交換もあります。与える義務もあれば、受け取る義務もあります。受け取ったものを返す義務もあります。ところが、純粹贈与は見返りを求めません。贈与と交換は対極に位置するかわりだと言えます。

賢治の父は古着商・質商でした。肌身につけていたものを金銭にかえることで商売が成立しています。庶民にとつては不可欠なものでした。しかし、菩薩行を生きようとする賢治にすれば、それはとてもいかにわしいことに見えました。また賢治は食べるものにも負い目を感じます。他の生きものの命を奪っているのですから、返済不能でもつらいことなのです。その負い目が他者に対する、切羽詰まったまでの奉仕につながります。これだけだと負い目を背負った暗い人になります。他方で「かぜがくれば、ひとはダイナモになり……白い上着がぶりぶりふるふ……」（『春と修羅 第二集』）という風が吹けば自分が発電機になる、自然から与えられた贈与者になつていく、という底抜けに明るい側面があるのです。その贈与者としての生き方と、先に述べた逆擬人法による生命とつながる生の技法とがつながっていて、私たちも賢治の作品を読むことで、この二重のつながりを感じることができるので

す。そして動物の存在がこのつながりの理解を可能にしているのです。

動物絵本の研究が人間学の研究であることを、最後にまとめておきましょう。

言葉をもたない動物との交流は、言葉によつて作りだされる自己と世界との距離を破壊します。動物は言葉をもっていないので、より直接的に子どもの生を、人間の世界のその底の生命の世界へと開くのです。ここでは、動物とは、子どもに有用な経験をもたらす「手段」としてだけではなく、有用性の世界を破壊し、共同体の生を超える導き手としての「他者」でもあるのです。こうして動物とともに生きる子どもは動物と出会うことによつて、「人間になること」と「人間を超えること」という二重の世界を生きていることができるのです。しかし、このように考えると、この二重の世界に生きることがなく、大人にとつても同様であることに気がつくことでしょう。つまり、人間は動物（野生）に触れることなしには生きてはいけません。



楠田さんに仕事の内容をたずねると、「宇治キャンパスの研究者と大学院生に對して、寒剤を安定供給することです」と答えが返ってきた。寒剤とは、「液体ヘリウム（摂氏マイナス二六九度）と液体窒素（摂氏マイナス一九六度）のことです」。ここではヘリウム液化設備を中心に、ヘリウムガス回収貯蔵設備、液体窒素供給設備を備え、液体ヘリウムが二〇〇リットル、液体窒素が八八〇リットル、常時、貯蔵されているそうだが、キャンパスへの年間供給量は液体ヘリウム約二万六〇〇リットル、液体窒素約八万五〇〇リットルとなっている。ヘリウムの液化、供給、回収が楠田さんの中心的な業務だ。

極低温研究が 欠かせないわけ

なぜ、寒剤が必要なのだろうか。「宇治キャンパスの研究者・大学院生の三分の一が日常的に寒剤を必要としています。研究者にとって寒剤は、日常生活における水道や電気、電話などインフラと同じように、あつて当たり前、なければ非常に困る存在なんです。切れ目があつてはならない、研究者に対するサービスです。これまでは工事や点検のとき以外は供給を停止したことはありません」とのこと。

寒剤は何に利用するものなのだろうか。「利用分野は物理学や化学、工学のみならず、医学や生物学まで多岐にわたっています。液体窒素は大気中にたくさんある窒素を液化したもので、手頃な冷却用媒体として幅広い分野で利用されています。また液体ヘリウムを使った極低温では、量子力学の世界が広がっています。例えば、超伝導を利用した実験装置（超伝導マグネット、超伝導量子干渉素子など）には欠かせないことができません」。極低温研究の歴史は、一九〇八年にオランダのライデン大学のカマリン・オンネスがヘリウムの液化に成功したときに始まる。一九四〇年代になると、ヘリウム液化機が実用化され、一九五二年に東北大学の金属材料研究所に導入された。「じつは私は五二年の生まれでして、今この仕事をしていることに何か不思議な縁を感じます」。京大では六二年に理学部に、七〇年に宇治キャンパスにヘリウム液化機が導入された。そして楠田さんは、宇治キャンパスに導入されて三年後から三四年間、ヘリウムガスを液化して二〇〇リットルタンクに貯蔵、ここから五〇リットル、一〇〇リットルの真空断熱容器に小分けにして各研究室に供給してきた。そして非常に貴重な気体である

液体ヘリウムには窒息、凍傷や破裂事故などの危険があつて、取り扱い方には細心の注意が必要であるが、その利用範囲は広い。楠田さんは宇治キャンパスの研究者と大学院生に、日常的に液体ヘリウムを供給している。



液体ヘリウムは非常に蒸発しやすく、光や振動、小さなエネルギーでも蒸発してしまうほどなので、取り扱いには細心の注意が必要。タンクから各研究室に供給される真空断熱容器（右は断面）は、アルミ箔と樹脂を重ねて輻射熱を遮断するようにしている。

ることから、蒸発ガスを回収して再度液化して供給する仕事に従事してきたのである。
**安定供給と
安全性を高めていく**
そこにはどんな苦労や喜びがあつたのだろうか。

例えば、ヘリウムガスは圧力が二五〇気圧もあり、液化ヘリウムは蒸発すると一気圧に約七〇〇倍の体積をもつ気体になる。だから、通常の運転時は安定している。でも、起動・停止の際にはもちろんのこと、停電や故障などの緊急停止のときは慎重で細心の注意が必要である。慌てて対処をせよと、事故にもつながりかねない。そこで、楠田さんは日ごろからトラブル発生時のシミュレーションを行なっている。また、少しでも利用の安全と効率化を図るため、さまざまな工夫を重ねてきた。一例をあげると、楠田さんが開発したシリコンゴム使用の「低圧逆流防止弁」がある。これをもちいると、蒸発ガスを効率的に回収したり、液体ヘリウムを小口容器に移すとき従来一分間に二リットル程度だった速度が、改良により一〇リットルに飛躍的に増加している。「化学研究所の江崎信芳所長や、直接の上司である小野輝男教授をはじめ多くの研究者から、寒剤の安定供給という地味な仕事を評価してもらい、やりがいのあつているのだと思うと、責任と誇りを感じます」。モノクロの花の写真を撮ることが趣味だという楠田さんは、そう言つて満足そうな笑みを浮かべた。

■くすだ としゆき
1974年 京都大学化学研究所文部技官
1975年 京都工芸繊維大学工業短期
大学部機械工学科卒業
2004年 現職

医療機関における 管理会計を考える

衣笠陽子

■ きぬがさ ようこ
大学院経済学研究科
博士後期課程
神戸市生まれ

民のあいだでの議論が不在のまま、医療が市場経済の方向に向かっていることに警鐘をならす内容でした。

管理会計学の研究では、財務諸表（貸借対照表など）を作成する目的以外に日々の収入・支出、減価償却など会計数値を使って経済活動を分析します。私は、人々の経済行動、意識、意志決定の仕方の投影として数値を分析したいと考えています。医療機関は管理会計をおこなっていない赤字のところが多い、といわれたりしていますが、実際に調べるとそうでもありません。

もともと原価計算という考えは、製造業を中心に発展してきたものです。医療は製造現場

でいえば修理サービスに近いものですが、患者の治療と品物の製造を同一のレベルで原価計算をすることは、現実とはそぐわない部分があります。管理会計の根本の考えは、組織が向かい

たい目標達成のために、組織が持っている資源をどのように使えばいいのかを考えるものです。例えば、予算はその方法のひとつです。その活動のために原価計算が必要になるのです。焦点

が効率面（利益）にいきがちですが、大事なものは、目標があつて、そのために資源をどう使うか、それを助けるための管理会計であつてほしいと思つています。医療機関を見ると、利益を追求する以外の目標をもつ企業形態のあり方のヒントがあるかもしれません。

医療組織が存続しつづけるための共通認識としての管理会計学という観点からの研究はいままであまりありませんので、サービス（情報、付加価値）の原価をどう考えるかを含めて研究のやりがいがあります。



輝きは
躍動から

次の的に向けて 矢を放つ

音羽佑規

■ おとわ ゆうき
文学部社会学専修4回生
滋賀県蒲生郡日野町生まれ



三 回生の十一月までの一年間、創部から二〇九年の弓道部のキャプテンを務めた。彼は滋賀県の進学校、県立彦根東高校でも弓道部に所属していた。そもそも彼は、弓道のどうい

からその心構えを説かれた。「部員の一人一人に細かく神経を配る必要がある」と。そして、自分でも「然り」と考えていた。しかし彼は、自分のことで精一杯になりがちな自分の性格もよくわかっていて、「実力で部員たちを引っ張っていこう。誰よりも優れたものを技術的に獲得することによって、有無を言わず、ついて来ざるを得ない状態に弓道部をもっていこう」と決意した。

主将になった二回生の十一月から、三回生の春先までは自分自身の力を極限まで磨き、「主将『弓道部一の実力者』を目標した。部員への気配りによって引つ張っていくのではなく、「俺について来い！」的にやっていこう」と思っていたのだ。春先は、

ふだんの練習で二〇射二〇中を何度も出した。一回生の新入部員にも、「さすが主将、スゲー」と思わせることに成功した。本番でも、春先はどんな試合

でも的をはずす気がし

なかった。「なぜあれだけ当たったのかと言えば、ふだんから内容の濃い練習を繰り返して、身体で覚えたからだと思うんです。だから試合のとき、部員に対しても『がんばれ、気合を入れろ』ではなく、『普段の練習どおりにやればいい』と明快に説得できた。キャプテンを務めることによって、ちゃんと目を見て人と向き合うスキルができあがったと思います。とにかくいろんなことを経験し、学びました。弓道部が、久々に一部リーグに昇格したのはこのときだった。

彼は、卒論も主将時代の体験を軸に、社会的な考察を加えるつもりでいる。また、オーストラリア人を母にもち、バイリンガルとして育った彼は、「国際的な性格俳優になる」という夢を叶えるため、いまはモデル事務所所属してチャンスを狙っている。進学も就職もしないと決め、的に向かって新たな矢を放とうとしている。

国際的学術交流を支援する

時計台を正面に見て左手にちよつとした

木立がある。その奥にある赤レンガ造りの美しい建物（旧石油化学教室）が国際交流センターである。建物の中にある階段教室では、かつて湯川秀樹博士が講義をしたこともあるが、現在では海外からの留学生のために日本語の講義などが行なわれている。

多様な留学生構成

国際部の山口茂留学生課長によれば、国際交流センターで行なっている仕事の概略

- ・ 海外留学を希望する学生に対する修学及び生活上の指導助言
- ・ 外国人研究者の日本語習得に関する支援及び生活適応上の助言
- ・ その他、全学的な学生及び研究者交流に關し必要なこと

は、次のようなものである。

- ・ 外国人留学生に対する日本語及び日本文化・日本事情に関する教育
- ・ 外国人留学生に対する修学及び生活上の指導助言

- ・ 海外留学を希望する学生に対する修学及び生活上の指導助言

- ・ 外国人研究者の日本語習得に関する支援及び生活適応上の助言

- ・ その他、全学的な学生及び研究者交流に關し必要なこと



↑ 国際交流センターの正面入り口。

→ 湯川秀樹博士が講義した階段教室で海外留学フェアが開催される。

↓ 留学生ラウンジ「きずな」での茶話会。尾池総長が顔を見せたときには、折り紙をおって好評だった。



二〇〇七年五月一日現在で、京大の全学生数は二万二七五八人。うち学部生一万三三八一人、院生九三七七人、留学生数は一二九一人、五パーセント強となる。そのうち「文部科学省が費用を負担する国費留学生は四割、残りは私費留学生です。日本全体では約十二万人の留学生がいて、そのうち国費留学生は約一万人ですから、京大の特徴として国費の留学生が多いことがあげられます」と山口課長。学部と大学院の割合を聞くと、「学部生は百数十

人に過ぎません。研究生まで含めると、約千人が大学院生で、うち博士課程で学んでいるのは約五五〇名です。学生の出身国・地域の多い順に挙げると、中国、韓国、台湾、タイ、インドネシアです。なかでも約五〇〇名が中国からの留学生です」。部局別では工学研究科・工学部、経済学研究科・経済学部、人間・環境学研究科・総合人間学部順になっている。

京大の国際交流の理念を具体化させる組織として「国際交流センター」が発足したのは一九八八年十二月のことだった。そして、同センターを母体として、一九九〇年六月、学内共同教育研究施設として「留学生センター」が発足。そして、二〇〇五年四月の国際交流推進機構の発足にともない、その支援部局として、あらためて「国際交流センター」と改変された。センターのス



「きずな」で留学生と談笑するチューターの西出俊君と森センター長。

タッフはすべて教員であり、事務的な仕事は留学生課が担当している。国際金融の専門家で、民間から公募で採用の国際交流センター長の森純一教授をはじめ、日本文学、社会学、言語学など九人のさまざまな専門家がチームを組んで、京大の国際交流の隆盛に向けて協働している。

受信型から発信型へ

現在、多くの大学が国際交流に取り組んでいるが、森センター長によると、「高等教育の国際化は必然的なもので、京大のように世界の最先端の研究・教育をやつてきた高等教育機関において、国際化の流れは不可避だと思います。また、今の中期計画にも、国際化を進めることが謳われています。二〇〇五年十二月につくられた『京都大学の国際戦略』では、受信型から発信型への変化が強く打ち出されました。国際交流推進機構は、次のような業務を行なっている。

- ・ 全学規模の国際交流推進のための情報収集や企画
 - ・ 国際的な大学連合組織を通じた多方位交流の展開
 - ・ 留学生や外国からの研究者受け入れのための基盤整備
 - ・ 国際交流担当職員の育成と組織力の充実
- 京都大学が未来戦略的に「国際交流」を考えていることがわかる。その戦略のなかで、国際交流センターは、冒頭に掲げた五つの仕事を受け持っているわけである。機構ができるまでは、京大の国際交流を進め

ていくための全学的な横軸がなかったのですが、今は副学長が機構長ですので、意思決定もスピーディです。京大としては、さらにいろいろな国から留学や研究にきてほしいと思いますし、また、日本人の学生にももつとたくさん海外を経験してほしいと思っていますので、いろいろな支援策を講じています」と森センター長。

留学生などに対する日本語教育はもちろん、英語による講義も充実している。創立百周年の年に始まった京都大学国際教育プログラム (Kyoto University International Education Program: KUIEP、クイネップ) では、海外十三カ国二十四大学からの約四十名の交換留学生と、科目ごとにほぼ同数の本学学生が英語による講義を受けている。

センター教員の打ち出す国際交流のアイデアも多彩だ。月ごとにテーマを決めて昼休みに行なう海外留学フェアや、日本で就職したい留学生向けの「ビジネス日本語講座」、留学生ラウンジ「きずな」での茶話会 (International Afternoon Tea: iAT、アイアット) など、さまざまなアイデアが実現してきた。

留学生と一般の学生のための交流の場として、一九一六年竣工の赤レンガ建物を改装して、二〇〇二年に留学生ラウンジとした「きずな」には、サロン、オーディオルームなどがあり、日本語や日本関係の書籍、ビデオ、CDの貸出しやパソコンの利用もできる。「きずな」での茶話会 (iAT) は、現在では学生たちが自主的に運営して

おり、取材当日も和氣藹々、留学生と日本人学生が楽しそうに談笑していた。

センター長は、「京大へ来て三年になりますが、周りにいる学生が皆若いですから、毎日がとても楽しくてしょうがない感じがです。彼らはみんな、こちらから何らかの刺激を与えると、活発な反応を示してくれます。また、国際交流にも関心があり、『何かしてみたい』という気持ちがすごく強い。だから、そういう機会をできるだけ増やすのが私たちの大事な仕事だと思っています」と、センターの重要性を強調した。



留学生が高校を訪問して、交歓する試みも行なわれている。

植物の姿を同時に再現する

永益英敏

京都大学総合博物館准教授

京都大学総合博物館が収蔵する植物標本は一二〇万点以上。植物標本室としての歴史が短いにも関わらず、世界でもかなり大きいほうだ。日本では最大級のコレクションを誇る。

ほとんどの植物標本は乾燥して台紙に貼られた、いわゆる押し葉標本である。標本は分類群ごとにカバーにまとめられ、分類体系にしたがって規則正しく配列されているため、目的の植物をすぐに閲覧できるようになっている。

なぜ、そんなに集めるのか

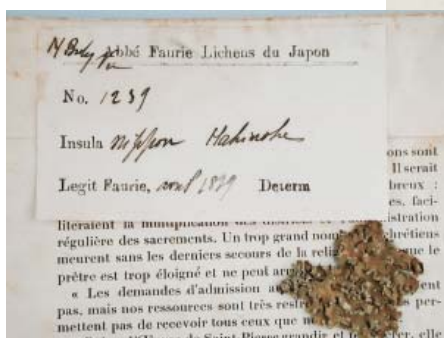
一〇〇万点以上の押し葉標本という、「そんなに集めてどうするのですか」という質問を受けることも少なくない。一種類あたり一枚あればいいのではないか、というのである。たしかに単なる見本（標本 specimen）という語には見本という意味もある）だと考えれば、図鑑の図のようにそれぞれ一点あれば用が足りるともいえるだろう。

しかし、実際の生物は同じ名前を



↑1955年に「カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」がアフガニスタンから持ち帰った植物標本。第二次世界大戦後、日本で行なわれた初の本格的な海外学術調査で、木原均、今西錦司両氏を隊長として、数々の学術的成果をあげた。

←1899年4月にフランス人宣教師フォーリーが、青森県八戸で採集した地衣類の標本。



物の姿を同時に再現する装置であるともいえるのである。

スタート時の幸運

だが、まんべんなく植物を集めるということはいへんな仕事である。野外に出かけ、植物を採集し、新聞紙に挟んで乾燥させ、ラベルとともに台紙に貼り付けて名前を確定し、しかるべき位置に納めなければならぬ。これができるだけ広い地域・環境で、さまざまな季節に行なわなければならないからだ。

総合博物館の植物コレクションは、基本的に理学部植物学教室において分類学研究室のもとで長期にわたって拡充されてきたものが核となっている。植物分類学の研究室がつくられたのは一九一九（大正八）年であるから、分類学の歴史を考えるとかなり遅い。全く何もないところからスタートせざるをえなかったのは、京都大学にとって幸いだったのは、植物分類学研究室の創設後すぐの翌二〇年に、フランス人ユルバン・フォーリーの植物コレクションの寄贈を受けたことである。

フォーリーは一八七三（明治六）年に来日し一九一五（大正四）年に台湾で客死するまで、宣教師の地位を利用して、四三年間にわたって日本およびその周辺地域で植物を採集し続けた。フォーリーは標本の一部を欧米の学者に送ってその研究成果を論文の別刷りや手紙の形で受け取っていたため、専門の研究者の検討を

■ながます ひでとし

- 1984年 京都大学理学部卒業
- 1988年 同大学院理学研究科博士課程中退
同教養部助手
- 1992年 同総合人間学部助手
- 1997年 同総合博物館助教授
- 2007年 現職

編集後記

池坊美香さんとの鼎談の中で、1輪の花をより美しくみせるために、他の花を切り落とし、空間の美（省略の美）を作り出すという話がある。われわれ科学や工学の研究の中にも、蜂の巣のハニカム構造、氷の結晶、さらには材料のナノスケールの自己組織化構造など、自然が織り成すさまざまな構造の不思議や美しさに魅入られて、その構造が作り出される原理やその構造がもつ機能を解き明かし、その構造を人為的に創製・活用しようとする研究がある。そのとき、漫然と構造を模倣するのではなく、不必要なものを切り落とし、必要な要素をより強化し、より高度な機能の発現を図ることを考える。このようなところにも華道と研究の共通点を感じてしまった。

さらに、人が作り出した形や構造があまりにも、自然の法則から逸脱してしまうと、美しさ（形の美しさ、研究結果の美しさ）を失う。その点でも、学問と華道は共通すると思う。西堀栄三郎の技士道の第1条「技術に携わるものは、『大自然』の法則に背いては何もできないことを認識する」、および第2条「技術に携わるものは、感謝して自然の恵みを受ける」という言葉が心に蘇った鼎談であった。

2007年9月

広報委員会『紅萌』編集専門部会

鹿児島県の植物研究者、土井美夫が採集したカワゴケソウ科の液浸標本。



受けた第一級の植物標本六万点余りが彼の遺族のもとに残されていたのだ。このコレクションは出遅れた京都大学の植物分類学にとって、遅れを取り戻すに十分な加速剤となったのである。

京都大学の植物標本は、以後約九〇年にわたって順調に増え続ける。植物分類学研究室のスタッフによる、さまざまな規模の調査隊によって多くの標本がもたらされた。一九二〇

年代に行なわれた琉球列島調査や第二次世界大戦後に行なわれた一連の東南アジア諸国の植物調査は、そのなかでも大規模なものである。歴代のスタッフは、日本の植物相を明らかにするため地方の植物研究家と緊密な関係を築き上げてきた。これらの植物研究家より寄贈を受けた標本も少なくない。また、世界各地の植物研究機関と重複標本を交換することにより、探検隊を派遣することなく外国の多くの標本を入手することも行なわれている。

収蔵室は熱い空間

植物標本を利用するのは何も植物分類学研究室だけではない。農学部や薬学部のように学内にもさまざまな部局が存在する。探検大学と異名をとるほどに海外調査の多い京都大学である。調査による国外の貴重な標本資料も個別に保管されてきた。ばらばらに集積された標本は、スタッ

フの世代交代や標本数の増加により次第に維持が難しくなり、すでにかなりの部分が総合博物館に集約されつつある。

京都大学の植物コレクションが重要なのは、第一に、多くの研究者により検討されてきた一次資料であることである。新しい分類群の学名の基準となるタイプ標本や、研究論文に使用もしくは検討した資料として引用された標本が多く収蔵されているため、新たに研究を始めようと思う研究者はまずその資料の再検討を行なう必要があるのだ。種数が多く、分類の難しい日本のキク科やイネ科・カヤツリグサ科は、それぞれ北村四郎、大井次三郎により詳細に研究されたが、彼らが証拠標本として引用した標本は今でも多くの閲覧・借用の申込みがある。第二に、広い地域をカバーする新しい標本が常に供給されているため、収蔵室の中で新しい発見が期待できるのである。充実

したコレクションは、それ全体が狭い空間の中に地球上の植物の姿を同時に再現できる装置であるということをお願い出している。過去に十分な検討がされていない標本の束は、研究者にとってはまさに宝の山である。古い標本の中から新種が見つかることも、決して稀なことではない。

植物標本の閲覧は研究者のみに許可されているが、京都大学総合博物館を訪れる植物研究者は年間延三〇〇人ほどになる。学外からがずつと多く、海外からの来客もある。海外へは標本を貸し出すことも多い。開館日数を考えると、毎日誰かが総合博物館の収蔵室内で植物標本を調査している計算になる。博物館の収蔵室は、決して役割を終えた標本が眠りにつくだけの静かな空間ではないのである。



押し葉標本を納めた収蔵室。分類体系にしたがって整然と配列されている。

京都大学広報誌 紅萌 — 第12号

2007（平成19）年9月25日発行

編集・京都大学広報委員会
『紅萌』編集専門部会

発行・京都大学広報センター

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

TEL 075-753-2071

FAX 075-753-2094

URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/>

E-mail kohho52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

©2007 京都大学（本誌記事の無断転載・放送を禁じます）



オープンキャンパス 2007

「あなたを待つ、探求と創造の扉。」をテーマに、8月9～10日の両日に6回目のオープンキャンパスを開催。全国各地から高校生、保護者等を含め2日間で約8500人の参加がありました。オープンセレモニーは、百周年時計台記念館百周年記念ホールで小島専孝オープンキャンパス委員会委員長（経済学研究科教授）の進行により、はじめに東山紘久理事・副学長から「ようこそ、オープンキャンパスへ」との挨拶、続いて尾池和夫総長から「京都大学をめざす皆さんへ」と題して、本学の歩みと現状そして未来についての話があり、その後、応援団による力強い演舞と在学生の熱いメッセージがありました。

また、国際交流ホールでは、入試・学生生活・就職・留学及びキャンパスライフ等の相談コーナーと在学生交流コーナーを開設、両日とも多数の参加者で賑わいました。その他、百周年記念ホールで、午後に「京大人気教員からのエール」「京都大学で環境問題に挑む!」「京大生協から見た学生生活・京大キャンパス紹介」と題した三つの講演があり、参加者は熱心に聞き入っていました。

さらに、在学生のボランティアによるキャンパスツアー、施設見学の附属図書館・総合博物館・百周年時計台記念館歴史展示室・学術情報メディアセンター北館・環境保全センターも多くの参加者がありました。また、学部企画の相談コーナー終了後にはそれぞれ大学構内を自由に散策、京大グッズを購入、時計台周辺や正門前では記念撮影をするなど1日中賑わいました。

第9回京都大学国際シンポジウム

「人間の安全保障のための地球環境学」を開催

第9回京都大学国際シンポジウム「人間の安全保障のための地球環境学」が、6月22日～23日に時計台記念館で開催され、学内外から延べ約400名が参加しました。海外からの招待講演者は、アメリカ合衆国、イギリス、オーストラリア、韓国、マレーシア、ベトナム、スリランカ、インド、イランなどです。このシンポジウムは、2000年度以来の大学をあげての事業ですが、国内での開催は今回が初めてでした。

22日の公開シンポジウムでは、シドニー大学国際安全保障センターのアラン・デュボン所長と環境省小島敏郎地球環境審議官から「環境と人間の安全保

障」「気候安全保障」について基調講演があり、その後「人間の安全保障のための地球環境学」をめぐりパネルディスカッションが行なわれました。翌日は三つの分科会（「サステナビリティを考える」「現代科学技術に求められる洗練とは何か」「フィールドとコミュニティから考える」）に分かれて講演と討論を行なった後、これらの分科会の議論を踏まえ、「今後の地球環境学の方向性と展望」をテーマとした総合討論を行いました。

今回のシンポジウムは、京都議定書採択から10周年、さらには大学院地球環境学・学舎の発足5周年に当たる年に、地球温暖化問題が国際的にも注目を集める中で開催されました。企画運営は、本学の国際交流推進機構と大学院地球環境学が担当し、財団法人京都大学教育研究振興財団、フィールド科学教育研究センター、京都サステナビリティ・イニシアティブが協力しました。

第46回全国7大学体育大会で総合優勝



7月13日、時計台記念館で第46回全国7大学総合体育大会開会式が、7大学（北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学）の総長ほか関係者を迎えて行なわれました。

開会式では、大会名誉会長の尾池和夫京都大学総長、大会会長の吉田治典京都大学体育会会長、日下宗之大会実行委員長が大会の成功を願う挨拶をし、澤田政嘉体育会幹事長が7大戦の盛会に向けての挨拶をしました。その後、谷口真穂京都大学女子ラクロス部主将による力強い選手宣誓があり、最後に京都大学応援団による演舞が披露され、華々しく大会の幕をあげました。

今年の大会は2006（平成18）年12月10日のアイスホッケーから始まり、2007年9月17日の卓球まで全40種の競技が開催され、京都大学は馬術、柔道、ゴルフ等で第1位を獲得し、また総合得点でも第1位の栄冠を手に入れました。

また、大学生協の7大戦応援企画として、生協食堂で出された「7大学メニュー」では、京都大学を応援する「Victoryカツ」が好評を博しました。



京都大学広報誌

紅萌 第12号

2007（平成19）年9月25日発行

発行●京都大学広報センター

ご意見・ご感想を kohho52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp にお寄せください